

長中だより

第20号（平成31年2月4日発行） 発行者 校長 小貴崇明



【2月の生活目標】

- 望ましい友達関係づくりに心がけ、充実した生活を送ろう。
- 進級・進学に向けて生活を見直そう。

○新入生保護者説明会～新入生は36名の予定～



1月28日（月）に、平成31年度新入生保護者説明会を実施いたしました。本校の教育方針の説明を含めた校長のあいさつの後、生徒指導主事から学校生活や登下校時の交通安全について、教務主任からは入学までの諸準備についてお話しさせていただきました。

また、お集まりいただいた機会を利用し、長沼地域担当の2名の主任児童委員からのお話や、「子育て講座」ということで、長沼公民館の生涯学習インストラクターや家庭教育インストラクターの方々から、思春期の子どもたちの特徴や接し方などについてお話しいただきました。

○中学生による模擬議会～本物さながらのやりとりが～

1月30日（水）、須賀川市役所議場において「平成30年度須賀川市中学生による模擬議会」が開催されました。長沼中からは生徒会の木村康佑会長（2年）、廣田歩叶副会長（1年）が議員として参加しました。



「（議員番号）21番・木村康佑議員！」と議長から声がかかると、木村君は「議長、21番！」と元気よく登壇しました。木村君は、長沼中での江花川学習で感じる事ができた河川環境を守る事の大切さと関連させ、須賀川市における下水施設の普及率や生活排水の対策について質問しました。答弁は、担当の上下水道部長だけでなく、橋本市長からも答えていただきました。本物の議会のようなやりとりの中で、「木村議員」は本当に立派でした。

また、模擬議会終了後に参加した24名の中学生議員が一人一人感想を発表しました。1年生で参加することができた「廣田議員」も立派に感想を発表していました。

○除染土壌等集約後の搬出作業開始について



昨年11月末より作業が続いておりました除染土壌等の中間貯蔵施設への輸送につきましては、ほぼ予定通り長沼中への土壌集約が完了しました。引き続き、2月5日（火）より除染土壌等を詰めた袋を積み込みトラックで搬出する作業が開始されます。生徒や保護者、近隣住民の方々の安全を第一に、2月末までに搬出が終了する予定です。今後ともご理解とご協力をお願いいたします。

○学校評価の結果から③～心の距離を縮めるために～

長中だより第18号で紹介しました学校評価の集計結果の中で、特に低い値として気になったのが、「生活や学習で悩み事があったり困ったことがあった時に、教職員に相談しているか」という質問に対する回答でした。具体的数値としては・・・

生徒＝2.78 保護者＝2.82 教職員＝2.88

という結果でした。また、学年によつての違いを探ってみました。1年＝2.82、2年＝2.72、3年＝2.80ということで、学年による大きな違いはありませんでした。これらの結果と関連して、保護者の皆さまから寄せられたご意見をいくつか紹介します。



○（前略）困っていることがあり相談するとすぐに対応策して下さい、親としてはとても安心して見守ることができています。（後略）

というご意見がある一方で・・・

- 意見や相談があつても、話すとき怒られそうで、なかなか話せないようです。元々あまり積極的な性格ではなく、少し内向的な面があるので、一度そう思うとなかなか一歩を踏み出せず溜め込んでしまいます。（後略）
- （前略）先生に話しにくい部分があると思うので、生徒が話しやすい環境、時間を作ると生徒一人一人が生活しやすいと思います。（後略）
- わからないときは先生に聞きなさいと言うと、先生に聞いても1回言ったとか前にも言ったと言って教えてもらえないみたいなことを言っているの、わかるまで先生に教えてもらいたいと思います。

などのご意見をいただきました。3学期最初の職員会議の折に、これらのご意見の内容を確認しました。様々な指導場面を通して生徒と教師の心の距離を縮め、一人一人の生徒に寄り添った指導・支援をしていきたいと思つています。

また、保護者と教師の心の距離も縮めることも大切であると強く感じています。保護者の皆様とは、学校の良い面はもちろん課題となっている点もしっかり共有し、保護者と学校の一体感のある教育をめざしてまいりたいと思つています。今後とも、ご意見を学校にお寄せ下さい。よろしくお願いいたします。



その他、保護者の皆さまからは様々なご指摘がありました。次号では、それらのご指摘に対する対応策や学校の考え、またご家庭やご家族の皆さまへのお願いなどをお示ししたいと考えています。

★大切にしたい言葉(40) 「合掌」(がっしょう)

日頃から神棚や仏壇、神社やお寺で手を合わせお祈りしている方も多いと思いますが、普段はそれほど機会がないような人でも、本当につらい時や故人に思いをはせる時などには思わず手を合わせてお祈りしています。宗教や人種によらず、人は何か願わずには、何か祈らずにはいられない時に、自然に合掌してしまうのかもしれませんが。先日、テニスの全豪オープン覇者大坂なおみ選手が、準決勝のマッチポイントを定めるサーブが入ったか入らないかの判定を待っている間の行動がとても印象に残りました。大坂選手は、ラケットを持ちながら手を合わせ目をとじ祈っていたのです。そして、入っていたことを知ったときの満面の笑み…ミスをした時にラケットにあたる彼女は大嫌いですが、祈る彼女は天使のようでした。

